國學院大學学術情報リポジトリ

獅子舞と虎舞：東アジアの民俗芸能論序説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 獅子舞, 虎舞, 縫いぐるみ風衣装, 中国の楽器, アクロバティックな芸態 キーワード (En): 作成者: 大石, 泰夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000045

獅子舞と虎舞
―東アジアの民俗芸能論序説―

‘Shishimai’ (Lion Dance) and ‘Toramai’ (Tiger Dance);
Introduction to East Asian Folkloric Performing Arts

大石泰夫

キーワード：獅子舞　虎舞　縫いぐるみ風衣装　中国の楽器　アクロバティックな芸態
关键词：舞狮　舞虎　身披狮布绒装饰　中国乐器　均包含杂技性演出

要旨

日本の獅子舞は、二人立ちの獅子舞と一人立ちの獅子舞とに大別されている。そして、前者は「伎楽系の獅子舞」と呼び、古代日本に伝来した伎楽の獅子舞の流れを汲むものと説明されている。また、アクロバティックな芸態をもつものについては、「散楽風の曲芸」と呼んでおり、これも古代に伝来した散楽から説明している。

今日の中国の浙江省寧波市周辺に伝承される梅林陳村及び梅山の獅子舞、河南省長葛市南席の虎舞を紹介し、一方日本の熊本県八代市八代妙見祭の獅子舞、静岡県南伊豆町の獅子舞と虎舞を例にして比較すると、「二人立ちの芸態で、縫いぐるみ風の装束である」「ドラ・ラッパ・太鼓が楽器の中心である」「アクロバティックな演出がある」というような共通点がある。

獅子舞の説明には、歴史主義的な説明がされるが、古代以降も日本と中国は海の道を通じて繋がっており、日本国内においてもそれは同様である。そうした道によってなされた文化交流が、今日にシシ系の芸能のあり方に表れているのである。シシ系の芸能は、今日の東アジアに広く共通する文化であり、これを比較する研究の進展が期待される。

摘要

日本的舞狮有两人站立式和一人站立式之分，前者被称作“伎乐舞狮”，起源于古代日本传统的舞狮艺能。其中，包含杂技要素的舞狮被称为“散乐曲艺”，亦来源于古代的散乐。

本论文在介绍今日流传于浙江省宁波市梅林陈村以及梅山的舞狮、河南省长葛市南席的舞虎的同时，与日本的熊本县八代市八代妙见祭的舞狮、静冈县南伊豆町的舞狮和舞虎进行比较，发现两者有以下相同点。第一，均为两人站立式舞狮 (虎)，且身披狮 (虎) 布绒装饰；第二，乐器以锣鼓喇叭为主；第三，均包含杂技性演出。

我们一般从历史主义的角度解释舞狮，但是中日两国从古至今均有海路联系，日本国内也是如此。通过海路形成的文化交流也体现在了舞狮艺能的表现方式上。舞狮艺能是广泛流传于东亚地区共通的文化，有待进一步开展比较研究。

序

少し古いデータに基づく記述となるが、『民俗芸能辞典』（東京堂出版、1981年）によると、獅子舞[1]について次のように記されている。

> 獅子舞は日本の民俗芸能の七十パーセントを占めるといわれ、南は沖縄から北は北海道まで、全国で数千ヵ所の祭礼やその他の場合に行われている。その芸態は多種多様であり、単にシシ舞・シシ踊といっても実際につける頭（かしら）は竜であったり、鹿であったり、猪・キリン、さらには獅子が虎に変わったりしている場合もある。これらの獅子舞の源流をたどれば、二系統に分類され、舞手が一人で頭に獅子がしらをいただいて踊る一人立ちの獅子舞と、獅子のホロに二人以上の人間が入って舞う二人立ちの獅子舞である。（後略）

数値などは、その後の調査の成果で訂正が必要な部分もあろうが、日本で最も多い民俗芸能で、日本全国に分布し、大別すれば一人立ちと二人立ちの獅子舞（二人以上というのが正確か）の二種類があることは、定説であろう。また、この記述では、虎舞は獅子舞が変わったものとも言及している。そして、この獅子舞は中国・韓国、インドネシアにも伝承される民俗芸能であり、東アジアに共通して今日まで伝承される民俗芸能といえよう。

そのような日本でもっとも多く、東アジアに広く分布している民俗芸能のシシ系統の芸能に当てられる漢字「獅子」の指すものは、ライオンとされている。ライオンは更新世末期の約一万年前までは、ヒトに次いで広く分布する大型哺乳動物とみられているが、有史以前には北アフリカや西南アジアからは姿を消し、サハラ以南のアフリカとインドの一部に棲息している。つまり、獅子舞の獅子のモデルのライオンは、その芸能の伝承地の東アジアには棲息しない動物なのである。

このように獅子舞を考えるにあたっては、そもそも「獅子が棲息しない地域の芸能」ということを前提に考えなければならない。しかし、そのことは逆にシシ系統の芸能を受け取り、伝承していく人々の想像力と、生活文化に根ざした発想力が、シシ系統の芸能の造形に多様性を生むことになる。また、文化の交流がシシ系統の芸能にも影響を与え、その多様性に重層的な伝来と影響とを想定することができると思われる。

本稿では、一国内を越えて、東アジア全体の芸能伝承を考える手がかりとし

て、獅子舞と虎舞を検討してみたい。

一、中国の獅子文化

獅子が東アジアにもたらされたことは、やはり中国の文献資料によらなければならない。紀元前138年、漢の武帝が張騫を西域に遣わし、中国と西域諸国との貿易ルート（シルクロード）を開拓した。このシルクロードが開通した後、中国には珍しい鳥獣が西アジア諸国から入ってきた。『漢書』西域伝には、「自是之後、明珠、文甲、通犀、翠羽之珍盈於後宮。蒲梢、竜文、魚目、汗血之馬充於黄門。巨象、師子、猛犬、大雀之群食之外浦囿」と記されている。この「師子」は獅子のことで、武帝の頃に獅子は外にある囲いに飼われており、その存在は人の知るところとなっていたようである[(2)]。また、『後漢書』西域伝には、「章帝章和元年(87)、遣使献師子、符拔」と皇帝に獅子を献じた記録があり、その後西域から獅子が献上された記録がしばしば見られる。

また、仏教の伝来・普及に伴い、仏教にとって獅子は欠かせないシンボルであり、仏典の中で様々な獅子が登場していることから、獅子のイメージは中国人の崇拝や信仰の対象となった。中国では鳥獣を瑞祥とする習俗があり、獅子は勇ましさと多彩な姿及び神秘的な性質をもっていることから、民間では次第に〈吉祥の動物〉とされた。後漢になると、獅子の像が誕生した。『水経注』巻三十一には、「塚西有石廟、廟前有両石決闕、闕東有碑、闕南有二獅子相対」とあり、獅子を表現する彫刻が墓の両側に施されるようになった。

三国両晋南北朝時代には、犀、象、獅子、鸚鵡、駝鳥、孔雀などの珍しい珍獣が続々と中国に入ってくる。この時期には、明州（今日の浙江省寧波市）の獅子文化が磁器の彫塑に現れ、早期の越窯青磁には多くの獅子の造形が見られる。その表意には、招福辟邪の願いが込められていると思われる。浙江省紹興地方で出土した西晋墓には、長さ11㎝、高さ8.2㎝の「獅形燭台」があり、獅子の頭が繊細に彫刻され、脇には羽毛が刻まれ、四足直立、気魄雄大に表現し、背部に燭の穴が彫られている。また、浙江省余姚市梁輝九頂山にある西晋太康八年（287）の墓から出土した獅形燭台は、長さ12㎝、高さ7.2㎝、獅子は首を上げ目を見開き、歯をむき出しにする姿をし、背部に直穴の燭台が配置されている[(3)]。唐代では、康居国、波斯国、吐火羅国などの国々が獅子を献上したという。唐代の獅子はさ

らに具体化し、古代から信仰された「狻猊」「虓」が獅子とみられるようになる。また、唐代の虞世南が『獅子賦』まで作っている。このように、唐代になると獅子文化は、文学・芸術・絵画・美術・彫刻などの分野に広く影響を与えていることが伺える。

二、獅子の芸能の日本への伝来

日本における獅子の存在を確認する資料としては、天平十九年（747）の『法隆寺資財帳』など、諸寺の資財帳に残る伎楽の仮面類の記録である。伎楽であるが、推古天皇十二年（612）に百済の人味摩之（みまし）が渡来し、伎楽を伝えたと『日本書紀』に記されている。奈良の正倉院には、天平勝宝四年（752）の銘がある「師子」が伝わり、これは最も古い伎楽の「師子」であり、東大寺大仏開眼供養の伎楽として練り歩いたものである。伎楽の獅子は「師子」と表記され、伎楽は中国西域に発し、呉地方を経て日本にもたらされたと考えられている。伎楽面として、すっぽり被るエキゾチックな仮面が残されており、師子は二人立ちの獅子舞でこれらの仮面を着けた役のものを先導したと考えられている。伎楽は、行道で行うものであったようである。

また、『続日本紀』に、文武天皇が大宝二年（702）正月に「五常太平楽」を奏させたと伝えられる。これは、朝鮮半島に起源があり、それが日本に伝わったとされる舞楽である。『江家次第』十三興福寺供養の条に、舞楽の「振鉾」に次いで左右の師子が出て舞台巽坤に臥したことが記されている。このほかにも平安朝に舞楽の師子が出たことがさまざまな記録にみえている。伎楽の師子とともに舞楽の師子も、宮廷や諸大寺の法会の庭などで演じられていたのである。

三、日本の獅子舞の二種類の分類

冒頭紹介したように、現在日本で確認できる獅子舞は一人立ちと二人立ちの獅子舞（二人以上というのが正確か）の二種類とされている。本田安次の説明を引用しよう。

> 獅子舞を大きく分けて二にすることが便利のやうに思ふ。その一は二人立、他は一人立の獅子である。前者は所謂大陸傳來の獅子、後者はそれに對

して我國固有の獅子と考へられてきた。前者とは一寸趣を異にするものである。

二人立といふのは、獅子頭を冠つて一人は前足になり、他の一人は後足になるもので、胴體は頭についてゐる幕が尾にまで伸びて自づと形づくられる。尤も古くは今日も沖縄などに見られるやうな胴體もそのままをあらはす寫實的な縫ぐるみ風のものもあつたやうである。幕の獅子の胴體に入るものは時に前後の二人には限らず、三人、五人のこともあり、稀には大獅子、或は百足獅子などと稱して大勢になることもあつた。又、後足のものが幕から出て、單に尾をとるだけになつたのもあり、尾を離してしまうと、これは一人立といふことになる。現に獅子頭を頭に載せ得るように工夫し、曲により一人立にもなつて舞ふものも出來た。この種の獅子は、一頭だけが出る所と、左右二頭が出るところとがある。又、古くは五頭出たこともあつたやうである（年中行事繪巻）。

かうした獅子に對して、獅子頭ははじめから一人が頭にかづくやうに出來たものをかづき、腹には多く羯鼓をつけ、この羯鼓を打鳴らしつゝ、三頭、四頭、六頭、八頭、十二頭等のものが同時に狂ふ獅子舞がある。これをこゝに一人立の獅子舞と稱す。中には羯鼓をつけない式のもあるが、これは省けた形であらう。多くの依代を背負ひ、その頭も獅子といふよりは、猪、鹿、龍等であることが多い[4]。

この本田の獅子舞についての二種類に分類するあり方は定説となり、前者（二人立ち獅子）を「伎楽系の獅子舞」、後者（一人立ち獅子）を「風流系の獅子舞」と

写真１　二人立ちの獅子舞
【案内神社の獅子舞（徳島県阿波市）】

写真２　四人立ちの獅子舞
【湊の獅子舞（静岡県南伊豆町）】

写真３　一人立ちの獅子舞
【高田獅子踊（青森県青森市）】

呼ぶことが多い。また、本田は現在の民俗芸能の二人立ちの獅子舞の獅子舞の諸相を分析して、太神楽などアクロバティックな芸態をもつものについて「散楽風の曲芸を演ずる」としばしば記していて、この見方もよく使われている。

しかし、現在に伝承される獅子舞を、古代に伝来し現在は存在しない（というか、どういう芸態かよくわからない）伎楽と結びつけたり、アクロバティックな芸態の獅子舞を同様に古代の外来の芸能である散楽と重ねるような、歴史主義的な呼び方には疑問が残る。

また、本田は、古い形として沖縄に伝わる縫いぐるみ風のものを挙げている。これは、平安初期の芸能を伝えるとされる「信西古楽図」などに見られる獅子舞の図からの指摘と思われる。しかし、今日の日本の獅子舞にも縫いぐるみ風のものはあるのであり、現在の中国の獅子舞もまた縫いぐるみ風の獅子舞である。中国からの獅子舞の伝来は、古代に終わったものではないはずで、それ以降の長い歴史の中で、古代の伎楽や舞楽とは別の獅子舞が伝来してもおかしくないはずである。

本稿では、まず中国の獅子舞と虎舞を紹介し、その後日本における縫いぐるみ風の獅子舞と虎舞を比較してゆくことにする。

四、寧波市寧海県梅林陳村の獅子舞と河南省長葛市南席の虎舞

中国では、北魏（386～534年）の頃に獅子舞が生まれたと考えられている。唐代にいたって、宮廷の中では一定のルールに従って定型的な芸態の獅子舞の競技を行うようになった。そして、唐代以降、獅子舞は宮廷から民間に普及し、また中原から全国へ拡大した。さらに伝承の過程で、次第に多様な民俗芸能に変わり、またさらには統合され、ついに「北獅」と「南獅」の二大流派が形成された。動物の動きを模した「形」を中心とし、雑技団において演じられてきた北獅の特長に対し、南獅は「意」に重点を置き、武術の足技の鍛錬の一環として始まった

もであるという。そして、北獅には、「文獅」と「武獅」の区別があり、南獅には「喜・怒・哀・楽・動・静・驚・疑」の八態がある[5]。

1、梅林陳村の獅子舞

古くは明州と呼ばれ、日本の海上交通の玄関とされた浙江省寧波市には南獅の獅子舞がいくつも伝承されており、筆者はその中でも寧海県梅林陳村と寧波市北侖区梅山の獅子舞団体を調査したが、本稿では梅林陳村の獅子舞を紹介したい[6]。

寧海県の獅子舞の起源については、二つの起源説明伝説がある。一つは、天台大師智顗によって獅子舞が伝えられたというものである。寧海県内には古くから寺院が多く、智顗大師がしばしば寧海県を訪れ、地元の人々に獅子舞の作法を教えたという。もう一つは、鑑真が獅子舞を教えたというものである。鑑真は何度も訪日のため渡海を繰り返したとき、寧海県を経過したことがあり、鑑真の教えによって寧海地域で初めて獅子舞が行われた。その後、廟会を行う際、必ず獅子舞が先導する形で巡行が始まるようになったのだというのである。伝説の真偽はともかく、寧海県の獅子舞に関する文献史料は明代以降のものである。清の康熙年間（十七世紀後半から十八世紀前半）編纂の『寧海県志』風俗には、「正月演劇、敬祖迎神、郷間十二起、城里十四起、乃十八乃止。」とある。ここの「演劇」とは、竜舞、獅子舞、灯篭舞などの民俗芸能のことを指している。このように寧海県の獅子舞は300年以上の歴史をもち、現在では50以上の獅子舞団体があるという。

寧海県の獅子舞は、長い歴史をもつことから「獅子舞の故郷」と呼ばれている。その中でも、梅林陳村の獅子舞は特に古くから伝承されてきたと伝えられる。

寧海県の獅子舞は長い歴史をもつが、梅林陳村の獅子舞は長らく途絶えていた。しかし、別の集落に伝わる獅子舞の師匠から習うなどして、1954年に復活することになった。梅林陳村の獅子舞は、一頭の獅子だった編成から、1978年に二頭に拡大し、1985～1989年に行われた二度の寧波市の獅子舞大会に参加し、優秀賞を得て四頭の獅子を授与され、現在では四頭編成の獅子舞となっている。

旧暦一月一日と十四日が、それぞれの集落の獅子舞の日で、梅林陳村の獅子舞は元宵節前後の一月十四～十八日頃まで他村を回っていた。獅子舞をまったくの素人から教えると、舞えるまで一ヶ月は最低かかるが、通常は上演の機会の二週間くらい前から１日２時間くらい呼吸を合わせるための練習をしている。

現在の梅林陳の獅子舞は、動作が多様化し、一見同じように見えても異なる動きも多くなっているという。その動作には、伝統的な技法として伝わる「掃場、追殿様蛙、鮒濺、上山進洞、舞拳棒、滚響叉」というものがあるほかに、豪快さと逞しさを表現したものや、「拝観音、踏四角、居眠、掻痒、舐毛、振毛」などの精細さと静かさを表現する動作もある。基本的な技法としては、

①出洞（穴から出る動作で、まわりを見回す）
②登脚（脚を伸ばす）
③盤腰（腰を伸ばす動作で、一人がもう一人を抱える）
④跨脖・施転（首を振る）
⑤造型（ポーズを作る）
⑥打滚（体を返す）
⑦抓痒（痒みをとる）
⑧瞌睡（眠る）

の八種類があるといい、文と武、動と静、拙と巧の動作が組み合わされるように獅子舞に表現されているという。「跨脖旋転」（首に跨って回転する）、「獅滚背」（背中から転がる）、「盤腰」（腰を上げる）、「獅子造形」（獅子らしいパフォーマンス）、などがある。

梅林陳村の獅子舞は、2011年11月に行われた寧海県の獅子舞大会で優勝し、伝統ある寧海県の獅子舞の中で、

写真４　梅林陳村の獅子舞（1）

写真５　梅林陳村の獅子舞（2）

写真６　梅林陳村の獅子舞の楽器（ラッパ）

最も優れた技量の獅子舞チームと認められているのである。そんなことから、たびたび寧波、奉化、鄞州、紹興、杭州など浙江省の内外に招聘されて、人気を集めている。

2、河南省長葛市南席の虎舞

南席（鎮胡街）虎舞は、伝承の歴史が古く、唐代天宝年間（742～755）より始まったと伝わっており、明清期に隆盛を極め、現在まで千年余り続いているとされている。伝説によれば、唐代に宋という名字の猟師たちが虎一頭を捕獲し、虎皮を剝がして虎の肉を食った後に、虎皮の模様に迫力があるため、それを身につけて虎の動きを模して舞うことになった。のちに人々は、五穀豊穣や年中行事の時に慶賀・魔除け・娯楽・遊戯のため、虎皮をまとって舞う伝統芸能を作った。これが南席鎮胡街虎舞の起源だという。

虎舞の伴奏には、大銅器・大盤鼓（太鼓）・銅鑼・銅鑼（ドラ）・海螺（ラッパ）の吹奏を伴い、一枚の虎の胴膜に二人が入り、一人が虎頭を、もう一人が虎尾を操る。日本の獅子舞の二人立ち形式である。演技が始まると、爆竹が鳴らされるなか、調教人役が戯虎圏（虎を戯る道具）をもって虎を楽屋から会場に連れだすようにして、演技が始まる。この調教人は日本の獅子舞の「獅子あやし」などと呼ばれる役と同じである。圧倒的な銅鑼や海螺の音が鳴らされ、リズミカルなドラと太鼓の音に合わせ、虎が上・下・前・後に踊ったり、机や山（台）に飛び上がったりするような芸態である。現在、南席鎮胡街虎舞は、五頭の大きい虎と五頭の小さい虎による演出ができ、伝統の演目としては武松打虎（武松という人物が虎を退治する）・猛虎上山・老虎智取風火輪（虎の火の輪くぐり）などがあり、新しい演目には虎登高台（虎の高台登り）・虎攀雲梯（虎の雲梯よじ登り）・虎走梅

写真７　南席虎舞の楽器

写真８　南席虎舞の南席虎舞一人立ちの小虎と大虎の足役

写真９　南席虎舞「虎攀雲梯」

写真10　南席虎舞「虎登高台」

花桩（が木の棒の上に走る）等がある。

ここに紹介した中国の獅子舞と虎舞は、後述する日本の獅子舞・虎舞の芸態と似ている部分が多い。高台登りや雲梯に登る芸態は、日本の獅子舞・虎舞にも共通しているものが少なからずある。

3、中国の獅子舞・虎舞の特徴の整理

筆者はこのほかに、寧波市北侖区梅山の獅子舞を調査したが、芸能としては梅林陳村の獅子舞と基本的に同じような特徴をもっている。

梅山の獅子舞は、行政が指導する「元宵節」（日本でいう小正月）のイベントにおいて、多く用いられている。この元宵節のイベントとは、伝統的な舞踊・歌謡などを自治会や老人クラブ、婦人会組織などに修練させて、披露させるというものである。2013年２月24日の大榭島元宵節において、大榭街道党工委辦事処が主催したイベントでは、パレードと舞台演出が実施された。このパレードとは、舞台で上演する団体が行列を組んで大榭街道内を巡行し、所々でそれぞれの芸能を演じるというものである。そのプログラムは以下のようなものである。

１、赤旗・官灯隊（区老年総会・46人）　２、女子舞龍隊（海湾社区・56人）
３、威風鑼鼓隊（海城社区・45人）　４、扇子舞隊（海信社区・60人）
５、鼓閣・台閣隊（榭南五村連合・50人）　６、軍楽隊（海韵社区・26人）
７、武術隊（区老年総会・46人）　８、吉祥腰鼓隊（海湾社区・47人）
９、十二生肖隊（海城社区・40人）　10、軍楽隊（海文社区･40～45人）
11、体操隊（海浪花・60人）　12、カ通隊（海信社区・42人）
13、迎親隊（金海岸社区・50人）　14、体操隊(海文社区・60人)

15、老年鑼鼓隊（区老年総会・50人）　16、車子・馬灯・群芸隊（榭北四村連合・60人）

17、秧歌舞隊（海浪花・56＋56人）　18、舞鳳隊（海韵社区・28人）

19、西遊記隊（金海岸社区・8人）　20、舞獅隊（金海岸社区・20人）

これをみると、いかにも中国的な民俗舞踊を取り込んで作られていることがわかる[(7)]。梅山は、中国拳法の宋派（『水滸伝』の宋江が始祖）発祥の地といわれ、梅山の獅子は拳法の技芸から変化してきていると伝えられる。この獅子舞には、柱の上で舞う「梅花柱」という演目がある。高さが80㎝～3ｍの数本の柱を1.8～2.8ｍ間隔に立てて、それぞれの柱の上に直径38㎝の円盤を載せたというものを舞台にして、その上で獅子が舞うというアクロバティックなものである。この「梅花柱」という演目は、もともとは武術の技の名称だったという。このように、今日の中国浙江省では、獅子舞などの伝統芸能が行政主導のイベント祭りの中で、伝承者ではない人たちがこれを習って上演しているのである。

このようにしてみてきた中国の獅子舞と虎舞を、日本の獅子舞・虎舞を念頭におきながら特徴を整理してみると、次のようになる。

・二人立ちの芸態で、縫いぐるみ風の装束である。

・ドラ・ラッパ・太鼓が楽器の中心である。

・アクロバティックな演出がある。

ということになる。

五、中国的な日本の獅子舞・虎舞

日本の獅子舞・虎舞の中にも、前節で挙げた今日の中国に伝承される獅子舞・虎舞と同様の特徴をもつものがある。日本の獅子舞や虎舞にも、二人立ちの獅子舞では梯子に登るような芸態をもつものがある。また、一人立ちの獅子舞の中でも、角兵衛獅子のように曲芸的な芸態をもつものもある。先に述べたように、これは散楽風の曲芸と呼ばれているが、ここでは先に挙げた中国の今日の獅子舞・虎舞に近いものを挙げてみたい。

1、熊本県八代市八代妙見祭の獅子舞

妙見祭の獅子舞は、中国風の衣装や楽器を用いるのが特徴で、中嶋町獅子舞保

写真11　三神宮の獅子舞の楽器
【八代郡氷川町（旧宮原町）下宮獅子舞保存会】

写真12　八代妙見祭の獅子舞
【中嶋町獅子舞保存会】

存会がその伝統を伝えている。この獅子舞は、元禄時代に八代城下の豪商・井桜屋勘七が奉納したのが始まりと伝えられる。勘七は、商用で長崎を訪れた際に、諏訪神社祭礼（長崎くんち）で見た羅漢獅子舞（現在は奉納されていない）に魅了され、これを妙見祭に奉納したいと数年思い続け、21歳の秋、長崎に渡り、太鼓や「ちゃんめら」を習い覚え、衣装や舞い方を工夫して、元禄四年（1691）初めて妙見祭に奉納したという。

妙見祭では、十一月一日の注連卸（八代神社境内）、十五日浅井神社大祭（浅井神社境内、松浜軒庭内）で舞われ、大祭当日の二十三日には神幸行列の先導を勤め、八代神社境内、神社前、砥崎河原、妙見中宮などで舞われている。場所によって、本庭・平庭・平長庭の三通りの舞い方がある。

ここの獅子舞の特徴は、獅子が二人立ちで縫いぐるみ風の装束であることと、獅子以外の楽人や「獅子あやし」と呼ばれる獅子と絡む役のものが中国風の衣装着け、ドラやチャルメラ、ラッパが用いられるということである。そして、この妙見祭だけではなく、近隣地域に同様の形式の獅子舞が伝えられている。また、この地域の獅子舞はあまりアクロバティックではないが、その源流と伝える長崎くんちの獅子舞は、二人立ちで縫いぐるみ風の装束とアクロバティックな芸態を伝えている。

2、静岡県南伊豆町の獅子舞と虎舞

静岡県南伊豆町には、三種類のシシ系の芸能が、それぞれ名称を変えて伝えられている。

まず、写真２で紹介した南伊豆町湊の四人立ちの獅子舞は「神楽（かぐら）」と呼ばれ、南伊豆町には二人立ちの地区もある。次に、縫いぐるみ風の衣装を着ける獅子舞があり、これは「籠獅子（かごじし）」（あるいは獅子舞）と呼ばれている。 最後に、虎の縫いぐるみ風の衣装を着ける虎舞である。これの伝承地区を示すと、

1、神楽　　大賀茂、田牛（とうじ）、青市下組、下賀茂、湊、手石、下流（したる）

2、籠獅子　青市中組、下賀茂、石廊崎

3、虎舞　　小稲（こいな）

というようになり、南伊豆町の中にシシ系統の芸能が三種混在している。

神楽はいわゆる二人立ちの獅子舞で、獅子頭の後ろの幕の中に二人以上の人が入る伎楽系獅子舞とされるものである。足については獅子の足というようになっていない。芸態も、日本の一般的な二人立ち獅子舞と同様のものである。

籠獅子は二人立ちの獅子舞であるが、人間の足も獅子の足となっていて、縫いぐるみ風のものである。胴体の中に藤の輪が渡されていて、その中に演じ手が入る形になる。芸態は、中国の獅子舞や長崎くんちの獅子舞のようにアクロバティックである。

虎舞は小稲のみに伝承されているが、これはもともと下田市伊勢町で伝承されていたもので、それが小稲に伝えられたという。また、下田奉行所の浦賀（三浦半島）移転に伴って、虎舞も浦賀に伝えられ、こちらは虎踊と称している。頭を獅子から虎に代えれば、竹の輪（藤ではなく竹）を含めて籠獅子とほぼ同じような構造になっている。そして、籠獅子同様、アクロバティックな芸態である。また、小稲の虎舞は、近松門左衛門の「国性爺合戦」の和藤内の虎退治を元に作られたとされているが、中国風の要素はない。ところが、伊勢町から伝えられたと

写真13　田牛の神楽

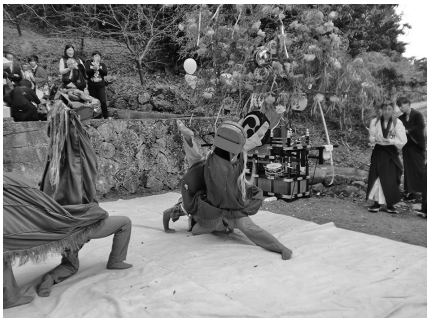

写真14　石廊崎の獅子舞

写真15　下賀茂の籠獅子

写真16　小稲の虎舞

いう浦賀の虎踊りは、中国風の演出がなされている。この籠獅子と虎舞は、芸能としては明らかに同種のもので、吉川祐子は石廊崎の籠獅子が小稲の虎舞によく似ており、籠獅子から虎舞が生まれたものとみている[8]。ただし、ここから浦賀に渡った虎踊、東北の虎舞の中には中国風の演出もあり、籠獅子と虎舞の演出と、長崎・熊本の獅子舞の影響がまったくないとはいえないと思われる。

写真17　浦賀の虎踊りの大唐人（おおとうじん）・唐人

このようにみてくると、南伊豆町のシシ系の芸能は、単純に伎楽や散楽を始発とする二人立ちの獅子舞が転じてきたというよりも、伎楽系の獅子舞が伝播し独自に変容していったもの、また一方でそれ以降に中国の獅子舞の影響を受けた九州などの獅子舞から影響され、新たに定着したシシ系の芸能もあるとみられるのではないだろうか。

結

筆者は、眼前にあるものから民俗の年輪を読み取りたいと主張してきた[9]。南伊豆町のシシ系の芸能は、まさに芸能の年輪を感じさせてくれる事例である。

二人立ちの獅子舞を、古代に海外から伝来した伎楽や舞楽に同型の獅子がある

ことから、伎楽系とか舞楽系の獅子舞とし、アクロバティックな芸態を散楽風の曲芸などと呼ぶ呼び方はいかにも歴史主義的である。少なくとも、古代伝来の伎楽の獅子の流れを汲む、というような発想で現在伝承される二人立ち獅子舞すべてを捉えることには問題がある。日本は江戸幕府時代にも中国とは限定的ながら交流はあったし、海はずっと海外と繋がっていた。そして、国内も同様で、海の道によって繋がっていたのである。そうした中に展開した文化交流は、シシ系の芸能に年輪のように刻まれているのである。

今日の中国と日本の獅子舞の諸相をみてみると、共通性が認められるものがある。一つには縫いぐるみ風の衣装であり、中国の楽器と衣装であり、アクロバティックな芸態である。もちろん、この特徴がある獅子舞はすべて、中国伝来の獅子の影響を受けているということをいうつもりではない。日本の中にも独自にアクロバティックに展開したものもあったであろうし、縫いぐるみ風の衣装を使うものもできたのかも知れない。しかし、中国との古代より後の時代の文化交流によって、もたらされたものもあるはずである。

民俗芸能は、各地の芸能の布置連関をたどりにくいものであるが、明らかに東アジアの国々には共通する獅子の芸能があり、そこには共通の要素がある。本稿は、その一端を捉えたにすぎないが、東アジア全体で獅子の芸能を比較検討する研究が展開することを願う次第である。

注

(1) 獅子の芸能には、「獅子舞」という呼称の他に「獅子踊」という呼称もあり、虎舞を獅子舞が転じたものと考える考え方もある。本稿においては、特に限定して記述しない限り、獅子の芸能を総称して獅子舞と表記することとする。

(2) 宮尾慈良「中国の獅子舞―北獅と南獅」『アジア演劇人類学の世界』、三一書房、1994年、164頁。

(3) 林士民、林浩著『中国越窯磁』(上)、寧波出版社、2012年、247頁。

(4) 本田安次「獅子考」(本田『本田安次著作集　日本の傳統藝能』第十巻　風流Ⅰ、錦正社、1996年、173頁)。

(5) 拙稿「中国寧波市周辺の獅子舞」(『國學院雑誌』第116巻8号、2015年) に詳述したので参照されたい。

(6) この二つの獅子舞については、前掲の拙稿「寧波市周辺の獅子舞」において詳述したので参照されたい。

(7) (5) の論文には鎮海区庄市街道の元宵節イベントなども例に挙げ、梅山獅子舞がかかわるイベントや結婚式などを紹介している。

(8) 吉川祐子「南伊豆の獅子舞分布を読み取る」(静岡県教育委員会編『小稲の虎舞』2010年)。

(9) 拙稿「緒論ー本書の目的と構成」(拙著『祭りの年輪』ひつじ書房、2016年、12頁)。